

類に属するものを1頭得ることができた。この種は最も分布の広い *Eukoenenia mirabilis* と異なり、また日本に最も近い産地であるタイの2種のいずれとも異なり、オーストリア産の *Eukoenenia austriaca* に最も近いが、触肢や歩脚の節の長さの比率や側方感覚器の形態を異にし、今のところ種名未決定である。

古東京湾のトラフカラッパとその生痕

福田芳生（福田古生物学研究所）

演者は長年、千葉県八千代市大和田町下横戸部落のミンデル・リス間氷期に属する中期洪積世の化石動物について調査を進めてきた。

同化石層は海成層であり、その最上層のパカガイ帯、甲殻類を多産する中層とハスノカシパン帯を含む下層の3部分から成っている。問題の中層より産出する多数の十脚目、短尾類の遺骸の中に大型のトラフカラッパ (*Calappa lochos* HERBST) の鉗脚と共に、特異な螺旋状の壊れ方を示す腹足類 (*Siphonalia fusoides* (REEVE)) が含まれている。この破壊痕は、Shoup (1968) の報告した *Calappa* 属による侵襲の痕とよく類似しており、トラフカラッパによる傷痕であると考えられる。このトラフカラッパは、当時、コブシガニ類と共に生活していたことを示しているが、一方のコブシガニ類と比較して保存の程度が著しく低く、Scavenger としての性格を持つコブシガニ類がトラフカラッパの死後、その遺骸を食害したことがその一因であると考え、トラフカラッパとコブシガニの共存関係についても合せ報告した。

相模湾産クルマエビ科 (Crustacea, Decapoda, Penaeidae) 2 種の分類・形態学的考察

藤野隆博（九州大学農学部動物学教室）

長尾類のうち特にクルマエビ類は水産上重要であり、良く知られているが、最近著者の研究により、形態的および分布上興味深い2種のクルマエビが相模湾より発見された。最初の種は *Funchalia* 属のものに比較的良く類似する。この属は形態的にかなり特殊化した遠洋性のグループで、主に、地中海、大西洋、アメリカ太平洋側に分布する5種より成

る。日本からは全く知られていない。手許の標本は多少若年個体ではあるが、全胸脚から外肢を欠くこと、尾節に3対の小可動棘を有すること、第1,2胸脚の基節・座節に強棘を欠くことなどより *Funchalia* 属と異なる。これらの相違は種レベル以上のものであると考えられる。次の *Aristeomorpha* 属の種、*A. rostridentata* (BATE) は従来、インド・太平洋域より知られるが、地中海、東部大西洋に分布する、*A. foliacea* (Risso) と同一種だとされた。この点に関して著者は多少の疑問を抱く。

厚岩湾の複合ホヤ類に寄生する橈脚類（特にホヤノシラミ類）について

大石茂子（三重県立大学水産学部）

複合ホヤ類に寄生する Notodelphyidae ホヤノシラミ科の橈脚類は主としてヨーロッパ近海から知られ、太平洋からは北米沿岸より2種が報告されているにすぎない。今回報告する *Doroixys uncinata* KERSCHNER 1879, *Prophioseides ampullacea* n. sp., *Demoixys fusiforma* n. sp. は厚岩湾の複合ホヤ類8種を調べた結果、*Amaroucium grabrum* VERRILL, *Diplosoma mitsukuri* OKA, *Distaplia dubia* (OKA) の3種にそれぞれ寄生している事がわかった。これらの Notodelphyids は体内にある incubatory pouch の位置によって体の膨張、体節の融合、付属肢の退化などが種々の程度におこる。複合ホヤ類の中には Notodelphyids の他に egg sacs を有する Ascidicolids などの橈脚類も寄生するが、これらは分類学的、系統学的に未開拓の分野に属するといえる。本研究は、これらの仲間達をも含めた橈脚類の分類学、生活史の研究の一部として行われたものである。

北海道産カラフトアカネズミ *Apodemus giliacus* の標徴について

小林恒明（北海道大学農学部応用動物学教室）

従来カラフトアカネズミ *Apodemus speciosus giliacus* (= *A. ainu giliacus*) の分布はサハリンのみとされてきたが、筆者が北海道で採集した北海道未記録のアカネズミは以下の特徴によりカラフトア

カネズミであるとの結論に達した。更に本アカネズミは独得の核型を示し ($2n=48\sim59$) 個体群としての独立性が明瞭であるため、以後独立種として扱うべきである。

外部形態：後足長 23 mm 以下、尾毛長 3 尾鱗環以上。小形で眼が大きくヒメネズミとアカネズミの中間の体形を示す。吻部はアカネズミより短い。

頭骨：吻部が短かく全体に丸味があり、アカネズミの幼体型に似る。鼻骨の形態が異なり、アカネズミに比し後端の巾が広い。門歯の付着角度が吻部に対し直角に近くなっている。

ハタネズミのサンプリング方法と 2～3 の測定値の変化

金森正臣

(東京教育大学理学部菅平高原生物実験所)

小哺乳類の種以下の分類単位で標徴として頭胴長・頭骨最大長の差などがあげられることがある。

同一場所で、4 日間ハジキワナで採集した標本について、採集経過日数と頭胴長・上顎門歯と第 3 臼歯後端の距離 ($I-M^3$)・下顎重の 3 形質について変化を計測した。雌の頭胴長、下顎重、 $I-M^3$ で日によって 95% の信頼限界で有意差が認められた。

またこれら 3 種の形質について 5 月、8 月、11 月の 3 回サンプリングを行った。

雌雄とも、3 形質について、95% の信頼限界で有意差が認められた。

これらの結果から、大きさなどを分類上の重要な標徴とする場合には、サンプリングの方法や、時期を考慮しなければならないように思われる。

ミドリゾウリムシの共生藻に感染するウィルス

川上久子・川上 襄

(鈴峯女子大学栄養・

広島大学工学部醸酵工学教室)

先に演者らはミドリゾウリムシ (PB) の培養物中にウィルスを見出し、このウィルスは径約 $1,400\text{ \AA}$ の正 20 面体で、PB の食胞内、食胞に取り込まれたクロレラ内、ならびに虫体外のクロレラ内に出現するが、虫体内の共生藻内には認められないことを

報告した。今回は PB の存在しない状態での共生藻へのウィルスの感染を試みた。培養物をメンブランフィルターで濾過し、濾液を $23,000\text{ g}$ で遠心して得たウィルスを、予め PB を $10,000\sim12,000\text{ g}$ の遠心または 500 KC , 15 sec の超音波処理して PB から単離した共生藻に感染させた。ウィルス核酸は共生藻の細胞壁を貫通して侵入し、増殖したウィルスは葉緑体、ミトコンドリア、ゴルジなど以外の細胞質内に出現し、共生藻が崩壊して放出される。PB の培養系内では PB の体表面にウィルスが付着し、PB は共生藻に対してウィルス感染の媒介者となると同時に保護の役目を果たす。従って、共生藻に脱共生が起これば直ちに感染が成立する。

ゾウリムシ *Paramecium trichium* の分裂における表層構造の殖え方について

洲浜幹雄 (広島大学理学部動物学教室)

繊毛虫 *Paramecium trichium* の表層を構成する小区画、すなわち、表構成単位 (unit territory) の細胞分裂時における殖え方が渡銀法によって調べられた。口部両側の約 14 本の短い繊毛列を除いて、一本の繊毛列は 39～47 単位で構成されるが、分裂面は後の娘細胞により多く単位を分配するように形成される。各繊毛列において、4 区画、3 区画、2 区画に殖える単位から、増殖しない単位まで観察され、これらのおのおのの単位数が一本の繊毛列で占める割合はほぼ一定であり、この増殖勾配は分裂面付近で最も高く、細胞両端に行くほど低くなる。両端では各繊毛列につき 4～5 単位は増殖しない。ただし、腹側左部分を占める繊毛列群は例外で、これらの各前端では約 8 単位が増殖しない。4 区画に殖える単位は上記の左部分の前の娘細胞に入る繊毛群に最も多い、一方、後の娘細胞ではそれらは観察されない。単位の増殖と分布は分裂期間中に完成される。

ハムシ科 (昆虫綱鞘翅目) 後翅における透膜と翅脈の関係 (予報)

鈴木邦雄 (東京都立大学理学部生物学教室)

ハムシ科 17 亜科 101 属 186 種 1264 個体について